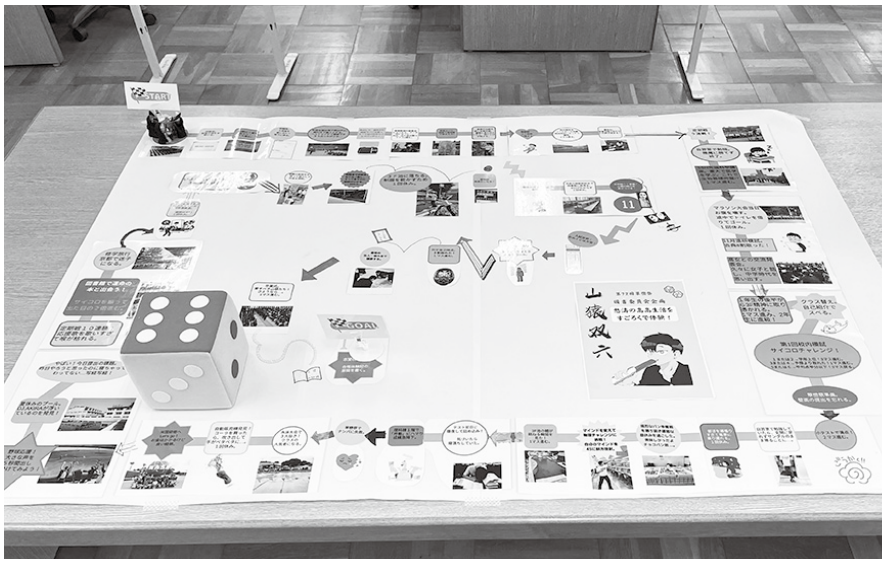
館報 Book Guide

第128号
令和７年３月３日　発行

高崎市八千代町二丁目４番１号
群馬県立高崎高等学校
図　書　館

高高の３年間をすごろくで体験！　翠巒祭企画 山猿双六



私たち図書委員は、翠巒祭で高崎高校の学校生活や行事を体験できる「山猿双六」を作成した。すごろくのマスには、「やばい！今日提出の課題。やろうと思ったのに寝ちゃって終わってない…写経写経！」というような高崎高校の美化されていないリアルを表現しているものもあった。来場者は、マスに描かれた様々な状況を楽しみながらサイコロを振っていたようだ。このすごろくの内容を覚えれば、高高での学校生活は完璧だと思う。

また、梶井基次郎の小説『檸檬』のラストシーンを再現しようというブースも設置された。『檸檬』は、「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた」という印象的なフレーズから始まる得体の知れない憂鬱な心情や、ふと抱いたいたずらな感情を、色彩豊かな事物や心象と共に詩的に描いた作品である。来場者は、試行錯誤しながらも楽しんでいたようだ。

『檸檬』は、三年生の現代文の教科書に載っているだけでなく、青空文庫でも無料で読めるので、この機会に手にとって、本を読むことに慣れ親しんでいただきたいと思う。

（担当　一年　野中・長谷川）

本物の浮世絵展

美術部作品も展示

『檸檬』再現選手権

佐鳥秋彦校長先生に

読書インタビュー

高高OBでもある校長先生に、図書委員がインタビューを行いました！

Q 高校時代は、どんな生徒でしたか？

A 自分の人生を振り返ってみて、後悔があるとしたら高校時代の過ごし方ですね。

一年のときは、学級委員長でした。ただ、当時の委員長の仕事は、先生に授業のカットを交渉にいくという今では考えられないようなことが主な仕事だったんですよ。まあ、便利屋だよね。家が遠いのもあって、部活動はやっていなかったけど、二年になって放送部に入って翠巒祭で活動しました。でも、あまり続かなくて、三年になってマラソン同好会に入って、翠巒祭で展示したり、当時大変盛り上がった紅白歌合戦に出たりしました。

Q 校長先生は、なぜ化学の教員になったのですか？

A みなさんも同じかもしれないけど、小学生の時の理科って、実験や観察があって楽しいじゃないですか。だけど、中学になると、徐々に興味が薄れて、高校に入ると難しくなって…。自分とはかけ離れた教科になってしまうのかなって。正直に言うと、高校時代一番好きな教科は数学で、化学はその次ぐらいでしたね。当時の先生方が面白い授業をしてくださっていたので、嫌いな教科ではなかったですけどね。だから、私は数学の方面に進む方がいいのかなと思っていました。ただ、どこかで教員という仕事が念頭にあって、せっかく大学に行くなら、教員免許だけは取ろうと決めていたんです。数学の面白さを伝えたいと考えていたんだけど、失礼な話、何となく数学というジャンルに発展性を感じられなかったんですね。それに対して化学は、新素材の開発など将来性が感じられたんですね。だから、ずっと数学で進路を考えてきたけど、そこから、化学という分野に魅力を感じるようになりました。

最初は、中学校の教員になりたいと思ってたんです。ただ、中学校の免許を取るには、生物学実験という講座を取らなくてはならなかったんです。本当に恥ずかしい話だけど、その内容が「カエルの解剖」だったんですね。私はカエルがダメで、どうしようか悩んで、結局中学の免許を諦めました。

大学4年の翠巒祭の時期、高高に教育実習に来たんですね。その時には、実は民間企業から研究職として内定が出ていました。でも、当時高高で教育実習させてもらうためには教員採用試験を必ず申し込むというルールがあったんですよ。だから、群馬県の教員採用試験には申し込んでいたけれど、教員になるよりは研究職の方がいいのかなぁと思っていました。当時、翠巒祭前日にクラス対抗の綱引きがあったんですよ。そこで生徒たちに発破かけながら「頑張ろう！」と、クラスに一体感を持たせて一つの目標に向けて「頑張る」姿を見ることができて、教員という仕事も面白いと感じたんですね。おそらく、高高に教育実習に来てなかったら研究職の方に行っていたと思います。それは、よく覚えていますね。

Q 好きな本はありますか？

A 正直に言うと、子供の頃から本がそれほど好きだったわけではないんですよね。本は、自分の中では娯楽だと思ってたんです。今考えると、それは違ってたんだけどね。だから、読書から何かを得ようというよりは、例えば気持ちが滅入っているときに、元気をもらうためのもの、という感覚だったんです。

思い出に残っているのは、小学校三年生の頃、担任の先生が紹介してくれた、子ども向けの科学名著シリーズにあった『ロウソクの科学』ですね。専門が理科の先生で、ロウソク一本でいろいろな科学の原理がわかると教えてくれたんです。私が一番刺さったのは「毛細管現象」という、ロウソクのロウが溶けるとそれが芯を伝わって蒸気になって燃えるという現象の話ですね。それが植物が根から水を吸引する作用と同じ原理だという話を読んで、別々に起きていることが同じ原理で結びついていると感じたことは強烈に印象に残っていますね。

高校時代は、図書館にはほとんど行っていなくて、正直あんまり本を読んでいなかったかな。英語の先生が授業中に紹介してくれた三浦綾子の『塩狩峠』は印象に残っているね。

大学時代は、当時は珍しかったけれど、高崎から電車通学していました。電車の中で、西村

京太郎の作品などを読んでいましたね。帰りに駅売りの夕刊を買ってから電車に乗るんです。五木寛之さんの『流されゆく日々』というエッセイが好きで、こういう考え方もあるのかと感じて、少しずつ読書に興味を持っていったという感じかな。

教員になってからは、村上春樹の作品などを読んでいたけど、年齢とともにあまり心に刺さらなくなってきたんだよね。その後、司馬遼太郎など歴史小説を読むようになってきたね。司馬遼太郎の歴史ものは全部読んでいるけれど、特に『峠』の主人公の生き方に感銘を受けましたね。

教育委員会で働いていた頃は、帰りが遅くなることも多くて、疲れていたんだけど、朝、駐車場から歩きながら、重松清の本をよく読んでいました。特に『きみの友だち』は、娘にも読み聞かせしたなあ。まだ読んでいなかったら、是非読んで欲しい作品です。最近では、今村翔吾の「羽州ぼろ鳶組」シリーズにはまっています。

Q 一日のスマホの利用時間はどのくらいですか?

A さっき確認してみたら一時間くらいだね。新聞を二紙デジタルで契約していてスマホで読むことが多いからそのくらいの時間になるかな。

Q 一時間！少ないですね。僕らは先生方から勉強時間が少なくなるからスマホの使いすぎについて注意されますが。校長先生は高校時代、勉強時間は確保できていましたか?

A 我々の時代は、任天堂のテレビゲームが出たばかりで、今のスマホと同じで、やり始めるとすぐに一時間とか経っちゃうんだよね。ただ、中学三年生の時、担任の先生から、毎日計画表を立てなさいと言われていて、それを続けていました。今のスクールダイアリーみたいなものはなかったから自分で計画表を作って、ほぼその計画通りにやっていました。

Q はあ…。

A ため息しか出ないか（笑）。まあ、勉強時間を確保するために、メリハリをつけて楽しめばいいと思いますよ。ただ、スマホやゲームは受動的な楽しみだから、自分から何か変えていこうということにはならないよね。

Q 校長先生のお話には本からの引用が多いですが、どういった基準で決めているのですか?

A 基準はないですね。乱読しているので、例えば新聞で紹介されている本を買って読んでみる、ということの積み重ねですね。気になったところに印をつけて、読み返したりはします。校長として、式典などで挨拶をすると言うのは大きな仕事だから。その時に生徒に刺さるかどうかよりも、自分が納得できる話をしようと心がけています。

例えば、この『思考の整理学』（本を見せてくださる）、東大・京大で読まれている本ということで話題だけど、自分自身が普段考えていることを言語化してくれていて納得感がある本でしたね。人間をグライダー型と飛行機型にわける考え方とか、物事を考えるときに一度発酵させるとか。アイディアが浮かぶには触媒となる刺激が必要なんだけど、本はまさに触媒となるものですよね。

Q 今、旅行に行けるとしたら、どこに行ってみたいですか?

A 私は出不精なんですよね。でも、北海道は好きで、三十回くらい行っています。

今、どこかに行けるとしたら、アメリカのバージニアに行ってみたいです。二十九歳のときに、若手教員海外派遣制度で派遣されて中高一貫校で勤務しながら、ホームステイしていたんです。そのご家庭のお父さん・マイケルが、厳格な人だけど、息子のように接してもらって、帰る時は大号泣するくらいだったんです。まだご存命かわからないけど、退職後にでも行けたらいいなと考えています。

Q 現在、進路について悩んでいる生徒が多いと思いますが（三者面談期間中に取材）、そういった生徒たちに向けてアドバイスなどはありますか?

A 人生って、なかなか思い描いた通りにはならなくて、紆余曲折あると思うけれど、その時に自分が後悔しないような生き方ができればいいと思うよ。みんなの将来は本当に可能性に満ちたものだと思うし、その可能性を広げるのも、狭めてしまうのも、自分次第だから。

成績優秀だと思う生徒、部活動で活躍して頑張っている生徒、それに対して自分はどうだろう?って、どうしても他人と比較しちゃうと思うけど、それが若いってことなんじゃないかな。だんだん歳を取っていくと自分の中に物差しができて、自分の軸が徐々に定まっていくんだよね。それまではいろいろ揺れるし、ブレるよ。それは、自分が成長していくために通らなければならないポイントだと思えばいいんじゃないかな。周囲から言われるままに、自分で考えずに、なんとなく敷かれたレールの上に乗っていたというより、できる限り悩んで自分なりの結論を出していくべきだと思いますね。

Q 本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。

A もう終わり?もっと話したかったなあ。楽しい時間をありがとうございました。

『感想』

以前の勤務校でのエピソードや高高生時代の思い出など、ここでは紹介しきれないたくさんの興味深いお話を伺うことができて、とても面白かったです。個人的には、歳を取るのはあっという間だというお話が印象に残りました。悩むための十分な時間がある高校時代を、より考え、挑戦して充実させたいと思いました。

佐鳥校長先生、大変お忙しい中ご協力いただき、ありがとうございました

（担当　二年　金谷・金澤）

高崎高校　読書感想文コンクール
令和六年度　群青大賞　最優秀賞（一位）

『銀河銀道の夜』を読んで

二年　**若林　和敬**

正直幸せというものがわからない。言葉の意味がわからないのではない。人々の周囲に起こる、個人の主観では幸せである事実が、本当に幸せと言い切れるものなのかがわからないのだ。ある人は何気ない一日が幸せだ、と言う。また、ある人は目標を達成した瞬間が幸せだ、と言う。人の役に立った時、と言う人だっている。その幸せは本当に幸せと言えるものなのか。

宮沢賢治の『銀河銀道の夜』の中に描かれた「本当の幸せ」というテーマは、人間の人生において、永遠に輝き続けるものである。本作を通じて、私は「本当の幸せ」について考えさせられ、自分自身の幸福についても深く見つめ直す機会を得た。

この物語では、主人公、ジョバンニの内面の孤独と苦悩、そして成長が描かれる。ジョバンニは病気の母親を看病しながらも、学校で孤立している少年であった。ある夜、彼は、不思議な銀河鉄道に乗り込み唯一の親友、カムパネルラと共に幻想的な旅に出る。この銀河鉄道の旅では、宇宙の星々を巡り、異なる人生を送ってきた様々な人々と出会う。そしてジョバンニとカムパネルラはそれぞれの人生における幸福観に触れる。例えば、科学者の話からは知識を追究することによる満足感が伺える。一方で亡くなった子供達が天国へ向かうシーンでは、純粋な心、また他人への思いやりを持つことの大切さが描かれる。これらの出会いを通じて、ジョバンニは幸福とは何かを問い続ける。物語のクライマックスでは、カムパネルラが川で溺れている子供を助けようとして命を落とす。この出来事を通して、ジョバンニは真の幸福とは自己犠牲の中にあるのではないかと考え始める。カムパネルラの自己犠牲的な行動は、他者のために生きる価値を示したのだった。そしてようやくジョバンニは悲しみの中で、本当の幸福についての答え、即ち自己中心的な満足ではなく、カムパネルラの様に他者を思いやり、支えることで得られる幸福こそ本当の幸福であるということを理解した。

『銀河銀道の夜』は、冒頭にも書いた通り宮沢賢治が「本当の幸福」とは何かを問いかけた作品であると言われている。中でも、幸福は自己満足や物質的な豊かさだけではなく、他者との関係性や自己犠牲の中にこそ存在するというメッセージが、特に強く伝わるように感じられるのは確かだ。しかし、私はこの作品への解釈はそれだけには尽きないと思う。

この物語を通じて、私は自分も含めた人々の幸福についても考えた。現代社会において多くの人々は物質的な富や自己の地位を追求し、得ることが幸福と考えがちである中でジョバンニとカムパネルラが旅を通じて得た教訓は、我々に「本当の幸福」の真なる形を教えてくれた。けれども私には、考えれば考えるほど、この世の「本当の幸せ」がそれだけであるとは思えなくなっていくのだ。この世には、自分を愛することで得られる幸せもあると思う。自らの夢を実現することで得られる幸せもあると思う。改めて私は、あの宮沢賢治の伝えたかったことが「自己犠牲＝本当の幸せ」で完結するとは思えないのだ。

ジョバンニは様々な人々の幸せと向き合ってきた。それらは実に多様で、一夜で巡るには多すぎるほどだった。そんな夜を過ごしたジョバンニだからこそ、彼なりの「本当の幸せ」を見つけられたのではないのだろうか。銀河鉄道の旅に出たからこそ、幸せを意識し、様々な幸せの形を認識したからこそ、「本当の幸せ」を求めたのではないのだろうか。

宮沢賢治の真意はそこにあると私は考える。

彼は壮大な宇宙の冒険を描くことで、幸せは初めから世界から提示されているものではなく、自分自身で世界を見て、聞いて、知って、考えて、解釈して、様々な経験を経た個人にこそ現れるものである、ということを表したかったのではないのかと私は思うのだ。

私にとっての幸せをわからないものとして留保したことは、間違っていなかったのだと今になって思う。少なくとも世間一般の幸せの枠組みに合わせた、窮屈な幸せとして完結させるよりかはよほどマシだったと思うのだ。自分で言うのも何だが、私はまだ若い。これからの人生、様々な人々との出会い、様々な経験を通して、ゆっくりと私にとっての幸せを見定めていきたい。いつか「本当の幸せ」即ち、私が見つけた私の満足の行く幸せが得られるまで、自分自身と向き合い、世界を知っていきたいと思う。これが私なりの銀河銀道の夜の過ごし方だ。

（担当　二年　矢作）

文芸関係表彰紹介

第27回全国高校俳句選手権大会
- 高崎高校チーム団体出場

第19回群馬県高校生文学賞

【俳句部門】
- 文学賞　三年　植原　拓巳
- 優秀賞　三年　後閑　啓太

【短歌部門】
- 優秀賞　二年　木村　陽翔

【散文部門】
- 優良賞　二年　大井田　智

第39回全国高等学校文芸コンクール

【俳句部門】
- 出場　三年　植原　拓巳

高崎高校　読書感想文コンクール
令和六年度　群青大賞　最優秀賞（一位）

ありがとう

一年　鈴木　雄弘

『君の膵臓をたべたい』。初めてこの題名を目にしたときに、私の中に湧いたのは、ホラーなのではないかという恐怖でもなく、題名に対する率直な驚きでもなく、「たべる」なんてどういうことなのだろう、という疑問だった。しかし、読み進めていくと題名の意味などが自分の心に深く染み入ってきて、夢中になって読み、そして最後には生と死、人とのつながりを再度考えさせられた。

この物語の主人公は、無口で読書が好きな高校生、「僕」。彼は病院で「共病文庫」と書かれた一冊の手帳を見つけ、その持ち主が明るく社交的な同級生、山内桜良であると知る。彼女は膵臓の不治の病であった。

桜良はまだ高校生だが、病気で余命があと一年もない。そのことを知っていて、それでも病気のことについては友人の誰にも打ち明けず、周囲を悲しませないように陽気に振る舞う姿から、私は彼女の芯の強さを感じた。桜良の言葉で「私も君も、もしかしたら明日死ぬかもしれないのにさ、そういう意味では私も君も変わらないよ、きっと。」というものがある。私はこれを読んだとき、はっとした。私達はきっと、明日が当然のように来ると思い、日々を過ごしている。今日出来ずにいたことを明日に先延ばしにしたり、話したいことを時間があるときでいいや、と先送りにしたり、そうやって「明日」があるとためらい、すべきことを怠けてしまう。それは誰しもがあることだ。しかし、桜良の生き方は違った。明日が来ないかもしれないことに真摯に向き合っていることに気付いた。それは、きっと病気になったからこそだと思う。それでも病気に絶望するのではなく、人生はいつ終わるか分からないということに目を向け、日々を丁寧に生きる桜良はなんて強いのだろう。と、心の底から圧倒された。

そして、桜良の自分らしく生きていく生き方に、同級生とも関わりを持たない孤独な存在、「僕」は変わっていく。いや、変えられたのだ。「変えられたんだ。間違いなく変えられた。」これは桜良が死ぬ前に「やりたいことリスト」を叶えていった後の「僕」の思いだ。桜良には人を変える不思議な力がある。無口で孤独だった彼は、「志賀春樹」として自分に嘘をつかずに、真っ直ぐに生きていく。

さまざまな経験をともにした二人は、友達や恋人では表せない複雑な関係となっていく。桜良は病の進行から入院し、外出許可が下り、春樹と会う朝に、通り魔によって命を落とす。

このとき、私は「大丈夫」という言葉を思い出した。昨年の五月に間質性肺炎で亡くなった祖母の言葉だ。いつも優しく、帰宅すると手作りのサンドウィッチやホットケーキをおやつにと待っていてくれた祖母。何気ない日々の会話でいつも言葉にしていたのは「大丈夫」というフレーズだった。入院後、自らの死を冷静に受け入れ、限られた時間を全力で生きる桜良の強さに、病が発覚してからも笑顔を絶やさず、家族と過ごす時間を何よりも大事にし、出来たての温かいおやつを用意してくれていた祖母の姿が重なるように感じた。在宅で治療をしていた祖母だったが、病棟に移ってから四日間で亡くなってしまった。祖母との時間がもっとあれば、もっと多くのことを話したり、聞いたりできたのに、という後悔がいつも胸を襲い、とても心が苦しかった。そんな日、父が見せてくれたのは、祖母が書いた一冊の日記。その中には、私や妹の行事や、活躍する姿を喜び、書き留めている様子が伺えた。「雄弘、自転車に乗って、初めての遠出。集合の小学校に嬉しそうに向かった。心配で二度学校に向かった。夕方、とびきりの笑顔で無事、帰る。よかった。」とあった。私の今までの自分自身の「大丈夫」という安心は、こうやって祖母に支えられ、励まされてきたんだと知り、思い切り泣いた。

「誰かと心を通わせること」桜良は生きるとは、の問いに対してこう答えている。読んでいく中でとても感動した。私にとって、「生きている」実感は一人では湧かないと、祖母との関わりを通して思ったからだ。私も桜良のように、日々の生活――家や学校、地域の中で、私と一緒に笑ったり泣いたり、喧嘩したり、些細なことから私を支えてくれる家族や友人と、心を通わせて生きている。そんな周りの人へ、伝えていこうと思う。自分の気持ちを。感謝の気持ちや謝りたいこと、大好きだと思っている気持ち――。自分が生きていることが当たり前ではなく、命に限りがあるからこそ。

「君の膵臓を食べたい」。外出許可の朝に、春樹が桜良のメールに送り、十二年後に見つけた、桜良から春樹へのメールにあった言葉。健康な臓器を食べると、自分の臓器が治るという言い伝えから、お互いの心に残り続けたいという双方の深い愛情が込められていることに気付いた。二人のように日々を色付け支えていく人へ。私も「ありがとう」を今、友人に、祖父母に、妹に、父母に、周りの人へ。

（担当　二年　羽鳥）

第70回青少年読書感想文全国コンクール群馬県内審査
〈自由読書の部〉

- **佳作**　「銀河鉄道の夜」を読んで　二年　若林　和敬
- **佳作**　ありがとう　一年　鈴木　雄弘
- **佳作**　「収容所から来た遺書」を読んで　一年　亀田　伍朗

『読書のすすめ』

教頭　小西　弘通

昨年の一月から三月に調査が実施された「令和五年度『国語に関する世論調査』」の結果が公表されました。「一か月に大体何冊くらい本を読んでいますか。電子書籍を含みますが、雑誌や漫画は除きます。」という問いに対して、「読まない」が62.6％、「一、二冊」が27.6％、「三冊以上」が9.3％という結果でした。また、調査方法が変わったため、今回の調査結果との比較には注意が必要ですが、平成三十年度の調査結果では、「読まない」は47.3％でした。本を全く読まない人が六割を超え、その割合は増加してきていると言えそうです。本校の図書館の利用状況も、令和三年度以降、減少傾向にあります。

「読書量は、以前に比べて減っていますか。それとも増えていますか。」という問いに対して、「読書量は減っている」が69.1％、「読書量は増えている」が5.5％でした。「読書量が減っている」と回答した人に理由を問うたところ、十六～十九歳の年代では、「情報機器で時間が取られる」と回答した人が最も多く、70.9％の人が理由としてあげています。

現在の情報社会において、便利なツールに時間を取られるのはやむを得ないところもあると思われますが、ぜひ本にふれ、本を読んでもらいたいと思います。

本は、知らないことを教えてくれるとともに、自分の考えを深めてくれます。他の人の考えを知ることもできます。また、自分では実際にはできないようなことを追体験することもできます。想像力を働かせながら、自分のペースで、ページをめくっていくのは楽しいものです。一冊の本から、考え方や生き方が変わるかもしれません。

まずは、本校の図書館を訪れてみてください。そして、とりあえず一冊、手に取ってみてください。

校内ビブリオバトル

去る七月十二日、高崎高校図書館では放課後に熱き闘いが繰り広げられていた。総勢六人による書評合戦、ビブリオバトルである。ビブリオバトルとは五分間という限られた時間の中でおすすめの一冊を紹介する、誰でも参加できるコミュニケーションゲームだ。バトラー（発表者）全員の発表が終わった後、一人一票の投票を行い、最多得点の本、「チャンプ本」を決定する。

今回のチャンプ本に選ばれたのは、一年七組若林颯人さんの紹介した『四畳半神話大系』（森見登美彦著、角川文庫）である。彼は、聴衆である高高生が本の登場人物を身近に感じることができるよう、本の内容や面白さを魅力的に語った。他のバトラーも本について熱心に語り、聴衆は紹介された本への理解を深めるため多くの質問をし、この熱き闘いは非常に接戦となった。

ビブリオバトルは来年も開催される。バトラーや観客として参加することで、読書の機会が減っている方には本に触れる機会に、読書家の方にはより本への理解を深める機会としてほしい。

（担当　一年　植木）

岩波ジュニア新書出張読書会

十二月十三日、図書館にて岩波書店ジュニア新書の「出張読書会」を開催しました。

読書会とは、各自が読んできた本について考えたことを仲間と共有し、本の内容について深く議論するコミュニケーションイベントです。一・二年生六名が参加し、岩波書店編集部の山下さん同席のもとに、およそ二時間にわたって、『女の子はどう生きるか』（上野千鶴子著、岩波ジュニア新書）をテキストにして、深く議論しました。

表面的には〝男女共生〟が謳われて久しい現代ですが、大学教育や暮らし方、ふるまいの性別による制限など、性別に基づく無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）は、日本社会に未だ深く影を落としています。今回は、一般に女性との接点が少ない「男子校」ならではの特徴を活かして、男性目線の自分たちでは気付けなかった〝女性の生きづらさ〟に理解を深めるとともに、著者の上野先生の考え方をきっかけにして、社会課題について考える機会になったかと思います。

真の意味での〝男女共生〟とは何なのか？すべての幸せを実現するにはどうしたら良いのか？現代社会の問題点の背後にある、そんな本質的な問題にも触れられた貴重な時間でした。

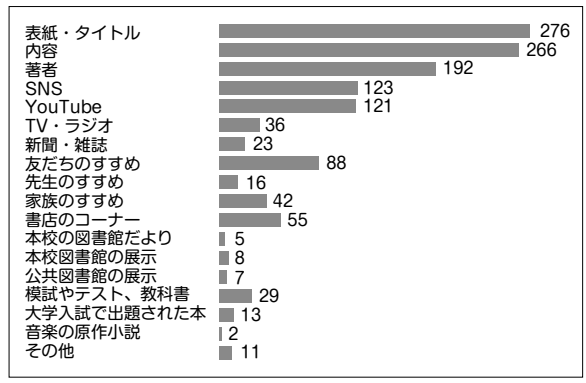
（担当　二年　星名）

読書アンケート2024より

図書委員は本校生徒の読書に関するアンケートを行った。その結果はグラフの通り、本を選ぶ基準においては昨年度と同様に表紙を重視して選ぶ人が多いことがわかる。また、内容や著者を基準に選んでいる人も多いことが読み取れる。

今はSNSで気軽に本に関する情報を得られる。それだけでなく著者自身が情報を発信していることもあり、それが無意識に内容や著者に対する興味を引き立てており、このアンケート結果に至らせたのではないかと私は思う。

（担当　一年　小金澤）



県立図書館高校生ボランティア

七月三十一日から八月二日までの三日間、前橋市にある群馬県立図書館でボランティア体験に行ってきた。

あなたは、県立図書館を知っているだろうか。高高生の中で高崎市立図書館を利用したという人は多いだろう。しかし、県立図書館を利用したという人は少ないのではないだろうか。私も、今回のボランティアに参加するまでは県立図書館がどういった役割の施設なのか、あまり知らなかった。しかし、今回の体験を通して、県立図書館の役割について、また、なぜ県立図書館が高高生に馴染みがないかを知ることができた。

県立図書館は、市立図書館と比べて「資料の保存」に重きをおいて運営されているのだそうだ。さらに、その資料は学術的、専門的な内容のものが多く、私達が普段利用する娯楽的な小説などは少ないとのことだった。さらに、県立図書館はその専門性を活かして、県内の公立図書館や学校との相互貸借を行うことで、私達が普段利用する市立図書館や学校図書館などを支える役目があるそうだ。他の図書館と役割を分担することで、互いを補っているのだと感じた。

今回の活動では、図書の貸出や配架、本にブックコートフィルムをかける作業を体験させてもらった。貸出や配架は、一見シンプルだが、間違いがおこると本が行方不明になったり、利用者に迷惑がかかってしまったりするため、とても重要な作業だと感じた。

また、今回の体験では参加者同士でのビブリオバトルも行った。自分の好きな本の魅力を、それを知らない相手に言葉で伝えるのは、なかなか難しく、自分の語彙力のなさを痛感した。しかし、参加者の好きな本の紹介を聞くことで、自分の知らない分野の本に対する興味がより一層強まったのも感じた。

今回のボランティア体験は、高校生に県立図書館、ひいては読書への興味を広げてもらうために行われたそうだ。この体験記を読むことで、あなたが県立図書館や読書について、より興味を持ってくれたら嬉しい。

（担当　二年　金谷）

ビブリオバトル群馬県大会

十一月二日、県立図書館で行われた全国高等学校ビブリオバトル群馬県大会に参加しました。昨年は定員の都合で参加できなかったので、今回が初めての出場となり、非常に楽しみにしていました。

私が紹介した本は『世界を変えた名演説』（池上彰／パトリック・ハーラン著、ちくま新書）という一冊です。この本は、歴史的に重要な演説を取り上げ、それがどのように世界を動かしたかを解説しています。マーティン・ルーサー・キング牧師の「I Have a Dream」演説や、ウィンストン・チャーチルの戦時演説など、心に残る言葉が多く紹介されています。

ビブリオバトルに参加するにあたり、図書委員会のみなさんには、校内大会の運営や県大会に向けた練習で、多大な協力をいただきました。みなさんのアドバイスを参考に、推敲を重ねて発表内容をまとめることができました。また、発表当日も緊張していた私を支えてくださり、心強かったです。みなさんの支えがなければ、この貴重な経験をすることはできなかったと思います。

今回の大会を通じて、ただ本を紹介するだけでなく、言葉の力や自分の伝えたいことをどう表現するかを学びました。会場での他の参加者の発表した本や、様々な視点はとても魅力的で、非常に充実した時間を過ごすことができました。より一層本が好きになり、チャンプ本を個人的に買ってしまったほどです。

今回の感動、驚きを、またビブリオバトルという形でみなさんにも還元したいと思います。本当にありがとうございました。

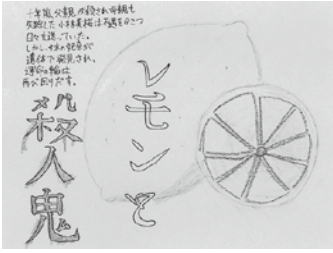
（担当　二年　井口）

POPでビブリオバトル

読書週間に合わせて、図書委員の広報班がPOPを作成した。POPには各図書委員の好きな様々なジャンルの本が個性的に紹介されていて、いずれも本への愛が伝わってくる渾身の作品だった。

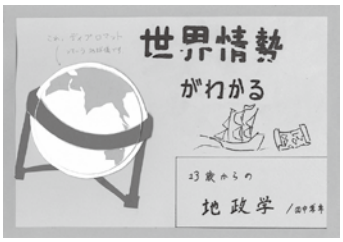
その後、どのPOPが最もその本を読む意欲を湧かせたか？というシール投票を行った。どの作品も甲乙つけがたく評価されており、投票結果は拮抗し、優劣がつけられなかったため、どの作品も素晴らしいという結果に落ち着いた。

（担当　二年　小倉）

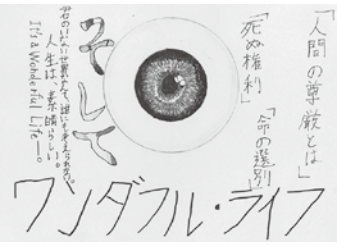


『レモンと殺人鬼』
くわがきあゆ 著（宝島社）

『谷川俊太郎質問箱』
谷川俊太郎 著（ほぼ日）



『13歳からの地政学』
田中孝幸 著（東洋経済新報社）



『ワンダフル・ライフ』丸山正樹 著（光文社）

レコード鑑賞会

十二月十九日昼休み、元・本校教員の渡辺彰先生をお招きして、レコード鑑賞会を開催しました。

渡辺先生の豊富なコレクションの中から、『Don't look back in anger（Oasis）』や『歌を贈ろう（竹内まりや）』などの名曲を鑑賞しました。

たくさんの生徒、先生方が集まり、ダウンロードやストリーミングとは違うアナログレコードの趣ある音色に浸っていました。

読書のすすめ・編集後記

本を読むときって、どうしてもそこから何かを学ぼうと構えてしまうことが多い。でも、そんな風に構えることはないのかもしれない。

言ってしまえば人生は後悔の連続で、あーすればよかったという愚痴に満ちているわけですが、しかし本当にあーすればよかったのかなんて、定かではないというか、何をもって良かったとするかにもよるけど、そんな事を考えること自体、すでに相当、現在進行系で良くないような気もする。後悔なんてしなきゃよかったというのが実のところ真理をついてるのでは？何かを学ばなきゃとか、ちゃんと理解して読まないと後悔するかもなんて思う必要はなくて、ただページをめくりながら「面白い事を考える人もいるなー」と感じる。それだけで十分。

けれど、世の中には「本を読まないのは良くない」とか、「もっとたくさん読め」と押し付ける風潮があるのも事実だ。今の子どもは本を読まなくなったとか嘆かれても、本を読むことが本を読まないことよりも「正しい」みたいに言われると、やっぱり暴力的だって感じる。本は読んだら偉いわけでもないし、読まないとダメなわけでもない。たくさん読んだからって人格が磨かれるわけでもないし、逆に一冊も読んでいなくても素晴らしい人はたくさんいる。読書家だから偉いなんて、そんなのただの錯覚だ。

とはいえ、僕自身は、本を読むことで得たものが多かった。新しい価値観に触れたり、全く違う世界を覗けたり、そんな体験が楽しい。だからといって、「みんな本を読め」と強制するのは違うと思う。本は好きなときに、好きなように読めばいいし、それでいい。読む理由なんてたいしたことじゃなくていい。「面白そうだから」「暇つぶしに」とか、そんな気軽な気持ちで本を手に取ってみるのが一番だ。そして、読んで「面白かったな」と思えたら、それで十分。少しでも気になる本があったら、軽い気持ちでページをめくってみてほしい。その一冊が、もしかしたら新しい感動をくれるかもしれないから。

最後になりますが、今回の図書館報を発行するにあたり、ご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。この文章を読んで、少しでも本に触れるきっかけを感じていただけたら幸いです。

（担当　二年　大澤）